絵でわかる寄生虫の世界
長谷川英男 著　小川和夫 監修

2016 年 10 月・講談社発行
定価（本体 2,000 円＋税）

評者 酪農学園大学 教授 浅川満彦

卒業間際の学生に獣医師国家試験（国試）で課された科目で，どれがもっとも難物であったのかと問うと，圧倒的に寄生虫（病）学と云う。国試では素直な設問ばかりが厳選されているので，普段の授業内容を把握していれば容易なはず。この回答結果には釈然としないが授業がダメなのか。酪農学園大学では複数教員が学部 2 年生から 3 年生を対象に講じており，その学年の関連科目の授業アンケート結果を一瞥したら，「授業に出るよりも独学の方がまし。だから良い本を紹介してくれ」などという記述（注文）が散見。もし，このような声が事実なら，担当教員の 1 人として猛省するが，授業撤廃はともかく，少なくとも良書推奨は教員の義務であろう。ところが，これは案外難しい。まず，モデル・コア・カリキュラム準拠教科書はかつてに比して大幅に内容が厳選（削除）され，記述も著しく簡略化されたため，このテキストを独習しても理解困難。かといって，いきなり医学系を含め分厚い専門書へ挑戦させるのは論外。数年前，寄生虫ブームのようなことがあり，随筆・一般書が数多刊行されたが，体系的学習では不適。さてさて困ったものだ。

だが，講談社が評者のこの密かで深き苦悩をどのようにして知り得たのかは謎だが，その社の絶大な人気シリーズ「絵でわかる」の約 40 のラインナップに寄生虫（病）学を編み込んだ（注：このシリーズは「ややこしい文章を読むだけでは，なかなか頭に入ってこない。そんな悩みを一挙に解消！わかりやすいイラストを満載した，一目瞭然の入門書」という明確な目的のもと刊行中：講談社 HP より）。

本書の構成は以下のような章題（概要；＜＞は評者追記）であった。

「寄生虫学とはどんな学問か」
「寄生虫の世界」（諸定義，寄生虫を含む動物群と代表的な種，寄生適応・進化とその意義，寄生と性＜雌に寄生する雄＞，宿主の行動を操る寄生虫，病気と免疫，生命科学＜アピコプラストの細胞共生＞）
「ヒトと寄生虫のかかわり」（人類の歴史と寄生虫，対策の歴史，現代＜再興＞の人体寄生虫）
「代表的な寄生虫の生態と生活環」（原虫および＜お馴染みの蠕虫のほか中生・環形・軟体含み，モデル・コア・カリキュラム教科書で消去された鉤頭虫もありの＞諸動物門）

本文のほか次のようなコラムが本書の魅力を増大させている。ノーベル賞と寄生虫，文学と寄生虫，寄生虫診断のこれから，天然記念物と寄生虫，自分の体で寄生虫を飼う，美しい寄生虫，フタゴムシと目黒寄生虫館。

学生諸君の（当然，現役獣医師の皆さんにとっても）鬼門となる生活環であるが，多数の美しい図の助けにより，間違い無く高校生でも理解しやすいものとなっている。なお，評者が担当する寄生虫病学各論の授業では，スライドは一切使わず，前述のモデル・コア・カリキュラムの教科書と板書で行う。だが，黒板に描く図が酷い。したがって，評者にとっても，生活環は鬼門なのである。今後は本書で描かれた図を少しでも参照に，もう少しましなものを供覧したいものだが。

問題点は次の 2 点であった。まず，犬糸状虫の記載（120 頁）で，「イヌの心臓にふつうにみられ」は，1980 年代までならその通りであるが，今日ではいかがなものか。また，この種が人に感染する危険性を指摘しているが，獣医寄生虫病学的あるいはネコブーム的には，ネコで寄生した場合の深刻な状況も簡単に触れて欲しかった。また，国試頻出の自家感染。本書でも有鉤条虫（93 頁），小形条虫（95 頁），糞線虫（103 頁）および蟯虫（113 頁）で登場したが，なぜかこの現象の定義が 95 頁でなされていた。順序的に，その前 93 頁でしておくべきであった。しかし，ほかに適切な書籍も見当たらず，教育的に優れていることは間違いなく，冒頭（授業への）クレーマー学生の自習用書籍として最適である。だが，本書は寄生虫という奇妙な生きものへの好奇心の惹起という面でなされた著作であり，もちろん，これが本書を著し，監修された方々の意志であることは云うまでもない。